

コラム

子育て応援歌



遊びは子育ての必須の条件

～小学生スポーツにこだわり続ける理由～

三浦捷也

(三浦歯科医院 院長)

40年以上も前のことになるが、近くのグラウンドで偶然、目を覆いたくなるような小学生の野球の練習風景に出くわした。当時のことをすべて記憶しているわけではないが、なぜか、グラウンドから子どもたちの明るく、弾んだ歓声が聴かれなかったこと、自由がなく、覇気のないオドオドした表情だけは、今でも不思議に思えるほど脳裏に焼きつき、決して忘れることはない。

大人にコントロールされ、大人の顔色を窺いながらプレーしている子どもたちが痛々しくさえ思えた。私が小学生当時、近所の友人と誰に管理されることもなく、日が暮れるまで夢中になって楽しんだ「三角ベース」のことをふと思い浮かべ、その変貌ぶりに驚く。

「小学生のスポーツが何かおかしい。小学生は小さな大人ではない。小学生にはその心とからだに合ったスポーツの仕方があるはずだ」そんな極めて単純な思いが小学生の野球に関わりを持つきっかけだった。しかしながら、気が付けば私の人生にとって最も多忙で苦勞の多い30歳代後半から70歳代後半までの40年間、子どもたちと深く関わりを持つ生活を余儀なくされることになっていた。

－小学生スポーツは誰のものか－

本来、子どもの自由な意思が尊重され、遊びの範疇を超えることのなかった小学生のスポーツに大人が勝手に介入し、今や小学生のスポーツ環境は、いわゆるスポーツ活動の強化対策の末端を形成し、常態化している。

子どもの遊びは、子どもたちだけの世界だから楽しいものであり、そこに進歩がある。大人に押しつけられた遊びなんて楽しいはずがない。それは自分が子どもだったころのことを思い出してみるとよく見えてくる。大人はいつも、子どもの行動に目を光らせるが、遊びまで管理しなければ気が済まないのだろうか。その背後には、殊の外、勝利を至上とする社会風潮と、大人の打算、思惑などがいつも絡み合っており、こうした状況は年々低年齢化している。

小学生スポーツの競技化、高額化はスポーツが大好きだった子どもが、技量のみで差別され、早々に切り捨てられ、スポーツが嫌になる子どもも多く見かける。更には、子どもたちからスポーツをする機会まで奪っている。

多感な小学生時代に歪んだスポーツ体験、スポーツ感が培われたのでは、日本のスポーツの発展はあろうはずがないし、秋田県が掲げる「スポーツ立県あきた」、「健康寿命日本一」の根底を揺るがしかねない由々しき問題でもある。

－父から感じとったスポーツ観－

「教育」にも「スポーツ指導」にも全くの素人が喜寿を過ぎててもなお、子どものことになると熱くなる私の言動・行動は、気心の知り合った友人でも、私の真意を理解してくれる人は極めて少ない。私は特別な家庭環境で育ち、偏った教育を受けたつもりもないので、私自身、不思議に思うが、今にして思えば、どうも父の影響が大きかったのではないかと考えている。

私の父は、歯科大学在学中に学生相撲に打ち込んだ。1930年、今から約90年も前に、全国の大学から10名選抜され、全日本学生相撲団の一員としてハワイ遠征に参加した。父は学生相撲とハワイ遠征を通して、多くのスポーツ仲間にも恵まれ、「スポーツの価値、意味、役割」など、スポーツのあり方について多くを学び、体験したようだ。

体力には自信のあった父だったが、病魔には勝てず、私の大学の入学式当日に55歳の若さで亡くなった。残念ながら、私が成人になってから直接父からスポーツについて聞かされることはなかったが、私が元気な父と過ごした小学生時代の父の言動、行動から感じとったスポーツ観、人としての生き方の一端が断片的ではあるが、私の記憶や心の中にしっかりと深く刻み込まれている。

「スポーツは勝たなければならない」と言い張る周囲の人たちを相手に、「学生スポーツは教育の一環、人間を高め、成長させるのが目的だ」とスポーツに対する熱い思いを語り、孤軍奮闘していた亡き父の面影が忘れられない。

—なぜ小学生のスポーツにこだわり続けるのか—

父の「学生スポーツ」への熱い思いが、最も感受性が強く、影響力の受けやすい小学生だった私の心のなかにタイミングよく、しっかりと入り込んだようだ。父のスポーツに対する情熱と使命感が、父からの伝言として私のなかで今も息づいている。人は、幼児期、小学校期の環境により、さまざまな種類の人格になると言われている。8歳から10歳頃に出来上がった人格で、多く人は成人後も生きている。子どもは単純に強いことに憧れる。だからこそ、子どもに対して「スポーツをするのは勝つためばかり

ではないのだ」と諭し、「何のためにスポーツをするのか」について小学生にもわかりやすく、丁寧に伝えるのが大人の役目であることを父との体験から知った。このことが、私が「小学生スポーツ」と「遊び」にこだわる理由である。

—遊びは子育ての必須の条件—

今、小学生のスポーツは目先の結果に拘泥するあまり、子どもたちから成長発育にとって大切な「自由と時間と空間」を更には「遊び」まで奪った。結果として、人間らしく生きるための機会をも奪っている。その責任は大きい。どうも指導者も保護者も「スポーツを通して、良き人間を育てる」というスポーツの基本」をどこかに忘れてしまっているようだ。

私は小学生のスポーツは、常に子どもの発想、子ども自身の興味や好み、ルールが中心にあること、更には、子どもたちが好きで、楽しむ環境でなければならないと考える。あくまでも「小学生の、小学生による、小学生のためのスポーツ」であることを基本的な活動方針として、40年間子どもたちに接してきた。

家庭裁判所の調査官として30年間「非行臨床」に関わってきた佐々木光郎氏（元静岡英和学院大学教授）は、講演会で次のように語っていた。

「すべての事件についてといってもよいほど共通していたのは、彼ら非行少年には幼児期の『ごっこ遊び』の体験がなかったことである。小学生になっても、子ども同士群れることは『無意味なこと』として追いやられ、まして自然体験はほとんど味わってこなかった。いわば『子ども時代』がないまま思春期に至った」と。世の中が変わり、世代が変わっても、子どもはちゃんと順序を踏み、時間をかけなければ大人になれないのだろう。遊びは子育ての必須の条件である。